

精神疾患や高次脳機能障害により休職し、 職場復帰支援を利用し復職した社員のキャリアに対する考え方の変化

○八木 繁美（障害者職業総合センター 上席研究員）

齋藤 友美枝（元障害者職業総合センター）

知名 青子・近藤 光徳・宮澤 史穂・浅賀 英彦・堂井康宏（障害者職業総合センター）

1 背景と目的

障害者職業総合センターでは、令和5年度より「職場復帰支援におけるキャリア再形成に関する調査研究」を実施している。

企業や事業所、支援機関によるキャリア形成を支える取組を、当事者のニーズに合った実効性を伴うものにするためには、当該当事者が、自身のキャリアについてどのように考え、また、企業や事業所、支援機関による取組について、どのように感じたかを明らかにすることが重要である。

そこで、以下の3点を明らかにすることを目的とし、復職した社員へのインタビュー調査を実施した。

①精神疾患あるいは高次脳機能障害により休職し、職場復帰支援を経て復職した社員のキャリアに対する考え方はどのように変化したか。②どのような要因が復職した社員のキャリアに対する考え方に影響を与えたか。③企業や事業所、支援機関によるキャリア形成を支える取組について、復職した社員はどのように受け止めているか。

本発表では、①②について得られた結果を報告する。

2 方法

(1) 対象者の選定

地域障害者職業センター（以下「地域センター」という。）及び高次脳機能障害者に対する復職支援を実施している支援機関（以下「支援機関」という。）に協力を依頼し、以下の3つの要件を充たす社員が勤務する企業の紹介を依頼した。

- ・精神疾患または高次脳機能障害により休職した方
- ・当該機関の復職支援を活用し復職した方
- ・復職後一定期間安定して就労している方（業務遂行可能で、突発的な欠勤や早退、遅刻が1か月間に複数回ない方）

次いで、地域センター等より紹介された企業に対し、調査担当者より、「企業アンケート調査」への協力及びインタビュー調査に協力いただける社員の紹介を依頼した。

(2) 調査期間

2024年9月から2025年2月にかけて実施した。

(3) データ収集方法

インタビュー開始前に、対象者に対し、研究の目的と方法、調査への協力の任意性、データの匿名化について文書と口頭で説明し、書面による同意を得た。調査方法は訪問

またはオンラインによる個別面接で、面接回数は一人1回、1時間とした。インタビュー方法は半構造化面接法とし、調査者用にインタビューガイドを作成した。質問項目には、直接的にキャリアに対する考え方や影響を受けた事柄について尋ねる質問のほか、キャリアに対する考え方に影響すると考えられた項目（例、職歴、転職や休職に至った経緯）を加えた。インタビューの内容はICレコーダーで録音し、逐語録を作成した。その際に、名前や場所などの固有名詞を匿名化した。

(4) 分析方法

事例として報告することとし、逐語録の中から、目的に掲げた3つの視点に結び付く記述を抽出し、可能な限り発言者の言葉を残しながら、事例ごとに項目別にまとめた。

3 結果

(1) 対象者の概要

精神疾患により休職した人が9名、高次脳機能障害により休職した人が3名だった。インタビュー時点での対象者の年齢は、精神疾患が20代1名、30代1名、40代4名、50代3名、高次脳機能障害が30代2名、50代1名だった。精神疾患により休職した人9名のうち4名は、休職回数が2回以上だった。直近の休職までの勤続年数の平均は、精神疾患が19.8年、高次脳機能障害が14.2年だった。復職からインタビュー時点までの勤務月数の平均は、精神疾患が34.0か月、高次脳機能障害が14.7か月だった。

(2) 事例のまとめ

ア キャリアに対する考え方の変化

キャリアに対する考え方の変化を問う質問に対し、工作上的キャリアについて語った人、生き方を含めたキャリアについて語った人など様々であったが、それぞれが変化について語っていた。

(7) 精神疾患による休職者

人間関係・コミュニケーションを重視した働き方・生き方への変化に言及した人が4名、健康を優先する働き方への変化に言及した人が3名、等身大の自分の受け入れに言及した人が2名であった。1名（20代の事例）は、「お金を稼ぐためには仕方がないというやらされ感」から、「仕事に関する知識や技術を身につけたい」という考えへ変化をしていた。

9名のうち7名は、キャリアに対する考え方について変わらない側面があった。それは、入社のも動機や仕事のやりがいにつながっていた価値観、仕事に対する責任感であった。

(イ) 高次脳機能障害による休職者

3名ともに、退院後、すぐに復職することを考えていたが、休職期間を経て仕事から健康や家族を優先する価値観に変化していた。一方、会社に貢献したいという思いは変化をしていなかった。

イ キャリアに対する考え方の変化に影響を与えたもの

(7) 精神疾患による休職者

9名のうち6名がリワーク支援による影響を挙げていた。影響を受けた支援内容について言及していた人は4名（重複あり）であり、キャリア講習が3名、アサーションが2名であった。9名のうち2名は、休職期間中の、リワーク支援を含めた様々な経験や人との関わりを挙げていた。

9名のうち1名（20代の事例）は、部署の異動と上司等による助言やフィードバックが影響を与えていた。

(イ) 高次脳機能障害による休職者

3名ともに、疾病をきっかけに自身が考えたことや家族の言葉が影響していた。また1名は、リハビリを受けていたメンバーとの交流により、自社以外の「自分の知らない世界に気づいたこと」を挙げていた。

4 考察

(1) 精神疾患による休職者

気分障害等の精神疾患は、その再発率の高さ等から、症状を抱えながら生きることを学ぶ必要があり^{1) 2)}、働き続けるには、健康な自分から、病気と共に働き生活をする自分へとアイデンティティを再構築することが必要だと言われている²⁾

事例の語りからは、リワーク支援における様々なプログラムを通じて、それぞれが休職に至る経過を振り返り、疾病に対する知識や自身に対する気づきを得、再発防止策を検討する中で、自分がどう働き、生きていきたいかという考えが影響を受けたのではないかと推察された。

また、9名のうち3名は、リワーク支援での経験を活かし、後輩をサポートするという役割を担っていた。3名のうち1名は、講習で学び、かつメンバーの考えを聴いたことで「昇進だけがすべてではないと思うようになった」と述べていた。これらの語りからは、リワーク支援でのメンバーとの関わりにより気づきを得た体験が「同じ疾患を持つ人の助けとなるような行動」につながっているのではないかと考えられた。

一方、本調査における複数の事例が、価値観の変化を語りつつも、変化をしていない側面に言及をしていた。

野田³⁾は、精神疾患により休職し復職をした個人が、病を通して自身の職業との関わり方を見直し、多様な自己を抱えながら、キャリア再構築の過程で自問を繰り返す様子を明らかにしている。

事例において「変わっていない」と語られていた内容は、入社のも動機や仕事のやりがいにつながっていた価値観、仕事に対する責任感であり、思いの強さは変わっても中核にある考え方は容易に変わらないのではないかと推察された。

(2) 精神疾患により休職した若年者

20代の事例では、部署の異動により、職務への興味・関心が醸成されていた。本人が「自分にあっていたのだと思う」と述べたように、生産に追われる部署から、焦らず落ちついて作業ができる部署に異動したことが、本人の特性にあっていたものと考えられた。また、事例の語りからは、面談時の上司や課長のフィードバックが、本人に「間違っていなかったんだ」という自信を与え、「資格を取りたい」「貢献したい」というモチベーションに繋がったことがうかがわれた。

(3) 高次脳機能障害による休職者

脳損傷者を対象とし、働くことの意味の変化に焦点をあてた先行研究⁴⁾では、新たな働き方や生き方を模索する中で、働くことの意味や価値が変化することや、それらの変化は、働くこと以外の人生にも影響を与えていることが報告されている。また、そのような変化が生じた理由として、仕事と脳損傷の発症の関係、再発のリスク、人生の意味を再考し、よい人生を送るには仕事以外に重要なことがあることに気づいたこと等が報告されている。本調査の結果は、この先行研究の結果と一致するものであった。

なお、事例の語りからは、それぞれが支援機関での様々な取組を通じて、自身の疾病や障害について理解を深めており、そのことも復職後の働き方・生き方を考える上でのきっかけの一つになったのではないかと推察された。

【参考文献】

- 1) Camille Roberge, et al. 『The Role of Work in Recovery from Anxiety or Mood Disorders: An Integrative Model Based on Empirical Data』, 『Journal of Psychosocial Rehabilitation Mental Health 9』, p.263-273(2022)
- 2) Hideaki Arima, et al. 『Resilience building for mood disorders: Theoretical introduction and the achievements of the Re-Work program in Japan』, 『Asian Journal of Psychiatry vol.58』, (2021)
- 3) 野田実希『「働くわたし」を失うとき―病休の語りを聴く臨床心理学』, 京都大学学術出版会(2021)
- 4) Ulla Johansson, Kerstin Tham 『The Meaning of Work After Acquired Brain Injury』, 『American Journal of Occupational Therapy vol.60(1)』, p.60-69(2006)